

『関西学院考古』が私にはある

坂井秀弥

1

2013（平成 25）年から毎年 2 月に 3 日間、上ヶ原の関学に通っている。大学院の集中講義「日本考古学特殊講義」のためである。大学の正門を入ると、正面に中央芝生と時計台、その背後の甲山。関学を象徴する風景だ。甲山を基軸としたキャンパスの景観設計がいまもきちんと保持されており、卒業生としてうれしい。自然と 40 年以上前の学生時代がよみがえる。正門から中央芝生を右手に進み文学部棟に着くと、正面入り口手前の下り階段から入る。突き当たり右側に暗くて重苦しい扉がある。昔のままだ。私が 6 年間通った関学考古学研究会、私たちは「考研」とよんでいた、その部室である。そこは 2016 年、事情があって学生会館に引っ越した。

私は、専門はと問われれば、職業がら考古学と答える。しかし、気持ちは複雑である。大学・大学院のゼミは古代史の福島・亀田両先生であり、考古学を専攻していないからだ。関学で考古学を教えておられた武藤誠先生は、私が 3 回生進級時に退職され、考古学の先生はいなくなっていた。だから、私は考古学をもっぱら考研で学んだ。考研に入っていないければ、新潟県や文化庁で埋蔵文化財の仕事することも、大学で考古学を教えることもなかった。そして、考研に入っていたとしても、『関西学院考古』をつくってなければ、いまの自分はないと思うのである。

2

私が関学に入学したのは 1974 年（昭和 49）である。新潟市出身の私は、二つ上の兄が新潟の縄文を代表する「火焰土器」の本を読んでいて、考古学に多少の興味はあったものの、強いこだわりはなかった。むしろ高校 2 年のとき修学旅行で飛鳥を訪れて感動したこともあり、古代史や寺院・仏像などに関心があった。それでもなぜか考研の扉に吸い込まれた。

部室には窓もなく暗くてじめじめしていたが、棚には土器などが置かれていて、不思議と落ち着く空間だった。当時の考研は、文学部 4 回生の岡野慶隆さん（川西市教委 OB）、法学部 3 回生で会長の北山勇さんを筆頭に 10 名ほどの会員がいた。文学部以外の学生も多く、考古学を専攻するものは少なかった。入部当初、週一回の勉強会で小林行雄著『日本考古学概説』の輪読や、土器・平板の実測練習などをおこなった。考古学はロマンだと思い込んでいたが、実測をやってみるとそうではなかった。

1 回生の夏休みに初めて現場に出た。まずは尼崎市東園田遺跡、その後宝塚市雲雀ヶ丘の古墳に移った。いずれも 2・3 週間ほどであったと思う。現場は暑くて慣れない作業だった。それでも、考古学というものを実感し面白さも感じた。それには岡野さんのほか関学 OB の橋爪康至さん（尼崎市）、岡田務さん（同）、元興寺文化財研究所の兼康保明さんなど、自らの手本となる先輩たちとの出会いが大きかった。2 回生になると、考研の 3 回生に文学部の学生がいなかったからと、会長を務めることとなった。

その年の夏は、滋賀県野洲市の兼康さんの現場で、公民館に合宿しながら過ごした。その当時土葬であった墓地の一角で、なじみのない中世墓を掘った。怖がりの私には全身の漆かぶれも重なってつらかった。しかし、現場が終わったときの達成感は格別であっ

た。このとき考古学を職業にしようとの思いがわいた。

3

私にとって大きな転機となった野洲の現場に出る前、ガリ版刷りの『関西学院考古』第2号（1975年）を刊行した。内容は関学構内古墳の遺構・遺物の報告である。その実測は先輩たちの手によるものも多い。図版と原稿を作成できたのは、大学院に進学した岡野さんや前会長の北山さんのおかげである。これが創刊号でないのは、私の入学前にすでに『関学考古』というガリ版刷りの小冊子が創刊号として出ていたからだ。その創刊号は研究会の活動記録であり、学術的な調査報告ではない。タイトルも「関西学院考古」に改めたこともあり、これを創刊号とすべきであったかもしれないと思う。でも当時こだわりはなかった。

第2号の刊行はまことにささやかな成果ではあったが、私には考古学の世界に入ることができた実感があった。この第2号を出したとき、関学考研がやるべきことが見えてきたように思う。当時、各地の発掘現場で学生がアルバイトで補助員をやることは一般的だった。私たちもそうであった。しかし、それでは単なるアルバイト要員の集まりにすぎない。大学の考古学研究会としての存在意義が問われるように思えた。他の大学で考古学研究会の名前を聞くこともあったが、研究会が独自に調査活動をおこなって会誌を出すことはほとんどなかった。

考研が主体となった発掘調査はできないが、西宮市や宝塚市など大学周辺にある後期の群集墳であれば、学生だけでも墳丘と石室の測量調査が可能だ。その報告を研究会誌に発表すれば、学術的な基礎資料となる。大いに意義ある研究会活動といえる。考古学の鍛錬にもつながる。岡田さんや岡野さんの助言も得ながら、このような考えになった。考古学の先生がいない関学で考古学を志すためでもあったと思う。

翌1976年に出した第3号は、2号の内容を発展させて仁川流域の後期古墳をテーマに、岡田さん・岡野さん共著（「双岡」の筆名）の考察も加えて、本格的な印刷物とした。もちろん岡田さん、岡野さんなどOBの方々の絶大な助力によるものである（写真1）。この後の第4号以降は、宝塚市長尾山の古墳群についての調査報告を柱にして、1980年3月の私の大学院修了時に、第6号が刊行された。私は大学院1年のときの第5号までは長尾山の古墳群の報告にかかわった。

『関西学院考古』に成果を掲載するために週末には長尾山に通い、墳丘の1/100平板実測と横穴式石室の1/20割付実測を続けた（写真2）。かつてロマンを感じなかった実測ではあったが、その過程で遺跡を自らが観察し、考古学の学術資料を作成する作業に大きなよろこびを感じることができた。報告作成の途上で、古墳の時期・立地と石室の形態・規模などの変遷なども見えてくる。それを若干のまとめに書いた。考古学の研究をしているという充足感が得られた。

4

1980年、新潟県に就職した際、考古学専攻でなくとも、ささやかながら『関西学院考古』の業績があったことは誇らしかった。新潟県でいくつかの発掘現場を担当し報告書をつくり、その過程で見出した興味を広げて論文を書くようになった。『関西学院考古』での経験の延長だった。こうして考古学で仕事ができるようになったのは、学生時代の現

場経験にもよるけれど、考研で自ら調査しその報告を『関西学院考古』として作成したことがじつに大きい。あらためて関学考研とその成果である『関西学院考古』は大きな財産だと思うのである。

私が関学考研を離れてから40年以上の歳月がたった。考古学の教員もおらず、考古学を専攻する学生もほとんどいない大学で、よくここまで継続したものだと思う。この間多くの学生がこの研究会をつないできたことに大きな感慨を覚える。数年前、部室の引っ越しを契機に所蔵資料の移管問題が生じ、その後も残された履歴不明資料の取扱いが課題になるなか、考古学専攻ではない学生たちが懸命に作業に取り組み、そして、ここに『関西学院考古』第11号を刊行することになった。満腔の敬意を表したい。

関学考研を支えてきた学生の大半は、私のように考古学を職業にしているわけではない。それでも、学生諸君にとって、考研と『関西学院考古』は、私と同じように人生においてかけがえのない財産になると思う。多くの学生のなかで考古学に興味ある者が集まり、共同でさまざまな活動をおこなう。だからこそできることが大きく広がり、個人ではなしえない成果が得られる。誰しも人生の岐路にある時期だけに悩みは大きいが、それを越えるものがあるにちがいない。私にとって、文学部地下にあったあの部室は、大学での大事な「居場所」であった。部室が学生会館に変わった今後も、その居場所が長く引き継がれることを願ってやまない。

最後に、このたびの資料移管と今号刊行まで、労苦をいとわず多くの指導・支援にあたられたOBの岡野慶隆さん、松林宏典さん、高田祐一さん、藤原光平さん、そして、顧問として見守っていただいている中西康裕先生に、心から御礼を申し上げるものである。また、考研の草創期に主力メンバーとして活躍され、武藤先生のあと顧問として長く指導にあたられた、故福島好和先生と、現場や『関西学院考古』作成に多大なご指導をいただいた故岡田務先輩のご霊前に、いまでも続く関学考研の活動についてご報告申し上げます。

(註) 小稿は、坂井秀弥「関学時代の大きな財産「関学考研」」(『KG歴史考古の会10周年記念誌』2019年7月)をもとに大幅に加筆修正した。

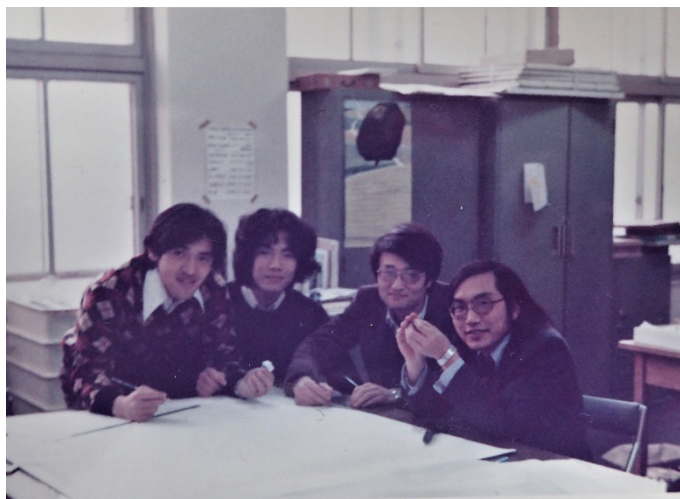


写真1

『関西学院考古』第3号の編集作業(1976年3月、尼崎市立花収蔵庫)

左から岩橋(法3)、坂井(文2)、小島(経3)、故岡田先輩(尼崎市)



写真2 『関西学院考古』第4号の古墳撮影(1977年10月、宝塚市中筋山手古墳群1号墳)
左から今田(商3)、坂井(文4)、衣川(商3)